

「恩人」…..それはちがいます。

私の亡夫を含め、クエゼリンの慰霊碑建立作業に協力した人たちを遺族会の皆様は「恩人」と呼び、感謝しておられますが、これは彼らにとって名誉なことと思います。すでに殆どの協力者が故人となった今、天国でどのように感じているかわかりませんが、おそらくこそばゆい思いではないかと思います。

私はこの作業に直接手を染めたわけではありませんが、始めから完成までその場に居合わせ、一部始終を確かに見ていました。私の受け持ちは、作業の進行状況を写真に撮り、遺族会（当時は故浮田信家様と連絡をとっていました）に報告書とともに現像された写真を送ることでした。「カメラオンチ」の私はフィルムの出し入れの方法もわからず、すべてを人まかせ。小さなコダックカメラのシャッターを押しだけという頼りない写真係でした。

一日の通常の仕事を終えたあと、仲間同士が現場に集まり、滝のような汗を流し、暗くなるまで続けた作業は確かに苦しいものだったでしょう。しかし、上役も監督もおらず、遠慮なく大声を出し合い、冗談も飛び出すなど、和気あいあいとした雰囲気は私にも感じられました。明かりの設備のない現場で、トラックのヘッドライトだけを頼りに、後片付けを終らせ、冷えたビールを飲みながら、とりとめもないおしゃべりを楽しんでいました。本当に楽しそうでした。このひとときが、彼らにとって貴重な時間であり、作業に対する大きな報酬でした。この人たちを「恩人」などとよぶより「協力者」または遺族会の「仲間」と呼んだほうが適切かと思います。

慰霊碑完成のあと、現地慰霊碑訪問の許可取得の方法に関して、遺族会では頭を悩ませていました。それが、意外と早く簡単に下りたことで遺族会では喜びよりむしろ驚きだったと、以前私は報告しました。ではどのようにして許可を得たのか…..その秘話のようなものをお知らせします。

ご存知のように、クエゼリンは娯楽の乏しい小さな島です。したがってパーティーやピクニックなどが、週末ごとにあちこちで開かれていました。場所や主催者が異なっても招待される顔ぶれは殆ど同じです。ひとたび仕事から離れば、上官も一兵卒もなく、上役も一労働者もなく、皆が平等に友達となります。無論、司令官もアロハシャツで出席して、誰彼の区別なく、気さくに話しに興じていました。そんな時、協力者たちは、遺族たちがいかに現地訪問を切望しているかを司令官に話し、理解を得るのに努力しました。司令官が、心を動かされ、許可の決意をしたのは、協力者たちが友人同志の会話として、回を重ね、誠意をつくして、訥々と説得した成果だと亡夫がしみじみと話してくれたことがあります。

汗を流した重労働に対する評価はいうまでもありませんが、この地道な熱心な説得の成功も評価すべきです。とはいえ、やはり「恩人」と呼ぶのはどうでしょうか？遺族会の「仲間」としてのお手伝いと考えて頂きたいものです。もし司令官室で正式に要請したとすれば、事情はちがっていたかもしれません。法律や規則は厳しいもので、厳守しなければなりません、人の心の暖かさと理解が入る余地があるのだと、私なりに納得しました。

最近テロ事件などで、入島が制限されるようになったことは残念です。それに比べて、あの頃はテロの心配もない平和な時期だったのでしょうか。私の経験がすべて「昔話し」になってしまいました。年月が容赦なく過ぎて行く空しさを感じます。

五十年前、マジュロで遺族会と最初に接触を持ったのは私でした。それを糸口にして慰霊碑完成までずっと糸がつながっていたことは、すでにお知らせしました。そして遺族会の最終目的である現地慰霊訪問まで、私は見届けました。多くの協力者たちが世を去った今、私がただ一人の生き残りとなりました。「生き残り」とはすさまじい言葉ですが、この言葉通り、すさまじく、しぶとく、元気で生き続け、「恩人」ではなく、長年の「仲間」として遺族会の皆様との親交を続けたいと願っています。

終り